

第四百十七回 青葉会 選句表

令和三年一月二十七日(木) WEB句会

選者 川口孤舟

投句・選句 伊賀山そらお 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 小早健介 在間千恵
 佐藤ただしげ 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか 中川雅夫 長谷見びん 福島正明
 古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄
 赤田堅 安部眞希子 重枝孝岳 庄司龍平 橋口隆 早川允章 松崎浩 村田くに子
 選句のみ 山本三恵

《互選句》 ○は特選 ◎は孤舟選者の選

十点 公魚のひかりとなりて釣られけり 孤舟 (紀・健・○千・孝・○恵・允・昇・○啓・○規・○壱)

九点 艇を塗るペンキの香り春隣 孤舟 (堅・そ・恵・○正・昇・堂・ゆ・壱・三)

八点◎ふるさとの訛りに和む初電話 昇 (眞・紀・孤・○た・隆・允・浩・規)

七点◎寒紅をさして舞台の人となる けい子 (眞・紀・孤・五・恵・び・壱)

六点 「河東節仲間の なかにし礼 追悼」 紀久男 (堅・○忠・龍・堂・正・け)

水切りの跳ね春水の点と線 孤舟 (紀・恵・堂・啓・三・盛)

川甚の閉店聞く日の寒さかな 恵洲 (堅・紀・千・堂・正・壱)
 ・・柴又の川魚料理の江戸時代から続いていた老舗です。

十字路を曲がり損ねて寒に入る 正明 (紀・○五・雅・啓・く・三)

◎現し世のあしたは見えず日脚伸び びん (紀・孤・健・龍・ゆ・盛)
 初御空おもたき潮の満ちてきぬ 全 (紀・龍・ゆ・孝・啓・三)

誕生日何も無く過ぎ冬薔薇 けい子 (紀・五・千・た・龍・規)

五点 疫病と向き合ふ覚悟去年今年 昇 (○眞・紀・そ・千・び)

歌舞伎座初春公演にて 啓子 (紀・千・雅・正・○け)
 長唄の第一声や春来たり 盛雄 (紀・孤・健・隆・正)

◎初夢やワインフィルから招待状 盛雄 (紀・孤・健・隆・正)

四点 冬晴や門出を祝う米国歌 そらお (○堅・紀・忠・隆)

海老蔵のでっかい見得や疫祓ふ 紀久男 (昇・び・け・○天)
 ・・演舞場の歌舞伎十八番「毛抜」

凧揚げの子に蒼穹と未来あり 孤舟 (健・孝・ゆ・允)
 待春のところが溶けるフロマーシユ 五郎太 (紀・正・○壱・け)

浄瑠璃方粋な揃いの黒マスク 千恵 (紀・た・雅・浩)
 「安野光雅逝く」

司馬遼と連れ立つ旅路冬の星 堂哉 (堅・紀・昇・啓)
 初御空東に筑波西に富士 全 (隆・允・浩・け)

さと風の味わいうれしぶり雑煮 ゆたか (紀・忠・浩・壱)

得意げに母は体操冬ぬくし
啓子 (真・紀・〇隆・く)
◎籠り日を子と酌み交わす四温かな
盛雄 (紀・孤・た・雅)

三点

岸壁に脚を垂らして春まぢか
孤舟 (五・健・〇浩)

◎人日の伸びるわが影踏み進む
五郎太 (紀・孤・浩)
鳴さかわす鶴寄る枝や春近し
昇 (紀・〇孤・〇允)
・番でよく来て鳴いています
雅夫 (〇そ・紀・ゆ)

若水を汲んで寿ぐ今朝の膳
ただしげ (紀・昇・く)
鯛焼きを買う気まぐれや日脚伸ば
恵洲 (啓・天・盛)

◎初夢の脈略なきまま覚めにけり
全 (そ・孤・規)
最負力士軒並み負けて寒募る
全 (紀・け・盛)

朝ぼらけ低き山より初日の出
ゆたか (五・た・龍)
沙羅新芽終わりなき日々思えとや
雅夫 (紀・〇孝・三)

・庭の沙羅をみていつもほっとしています
啓子 (紀・孝・〇三)
初詣ひと咫(ひとあた)半の箸求む
びん (そ・紀・允)

寒月や生業閉つる夜の街
全 (紀・雅・く)
再開発の残る一隅石落の花
規雄 (た・ゆ・び)

飽きもせず山鳩鳴くよ冬の朝
けい子 (紀・五・び)
読初や「業平」に知るうたごころ
天牛 (紀・孤・孝)

◎寒鴉心射るよな目の強さ
盛雄 (紀・隆・く)
数の子の薄皮をむく妻無口
全 (真・紀・恵)

孫が継ぐ祝箸の名書く仕事
盛雄 (〇紀・〇堂・昇)
髪染めし妻の立ち居や小正月
忠彦 (紀・千)

二点 寒北斗連夜星座を支配せり
◎大寒の過ぎて万物目覚めけり
全 (紀・孤)

初芝居親子孫三代車引
ただしげ (紀・雅)
・高麗屋の親子孫三代で松王・梅王・桜丸に
千恵 (紀・天)

獅子舞や上手に唾ふおひねりを
全 (紀・忠)
飾り終へ千両鳥に馳走せり
全 (紀・〇健)

復路での快拳霧散の三日かな
全 (忠・規)
初せりも耳に鉛筆常のごと
恵洲 (忠・孤)

◎海原のスペクタクルや大初日
昇 (忠・〇盛)
線香の封の切り初め初読経
堂哉 (紀・〇盛)

巢籠やテレビで寿ぐ初歌舞伎
ゆたか (堅・紀)
初夢や借金取りが現れる
正明 (紀・天)

空深く煌めくオリオン窓に見る
啓子 (紀・〇龍)
久しぶり包丁研ぎや初氷
正明 (紀・盛)

初芝居若手の熱気歌舞伎座に
ただしげ (そ・紀)
遅れ来し賀状の返事手紙書く
亜也 (紀・く)

股引や穿く穿かざるの見栄残り
全 (紀・堂)

家中の水の出る場所注連飾る
天牛 (真・紀)

梅咲きて四方玲瓏の大坂城
盛雄 (紀・恵)

大雪や渋滞の列切れ目なし

そらお

(紀)

リウマチは死語にあらずや初薬師

紀久男

(五)

元旦にテレビ壊れて静かなり

忠彦

(紀)

正月に緊急宣言暗き顔

全

(紀)

成人式せずとも立派に歳をとり

全

(紀)

初芝居若手揃ひておめでたう

五郎太

(紀)

初稽古ズームの中の床飾り

全

(紀)

年来る同じ干支なる母娘

全

(紀)

枯木立花咲翁に会えぬかと

健介

(天)

大寒や株あれあれと指咥へ

全

(紀)

初春の太夫の声はハイ・ノート

千恵

(紀)

獅子舞や目出度さ重なる銀座ライオン

ただしげ

(紀)

・銀座ライオン創建86周年

堂哉

(規)

初鴉富士を見やりて松の上

全

(天)

受験子の礼深深と初詣

全

(天)

コロナ禍の初場所日和つづきけり

ゆたか

(紀)

雪見れば仔犬を抱きし日を思ふ

雅夫

(紀)

・仔犬の名 タロー君といたしました

雅夫

(紀)

黄梅は希望歌うやはや盛ん

全

(紀)

・黄色満開ほっとします

びん

(紀)

闇に棲む鬼に豆打つ声聞こゆ

正明

(び)

便利さに慣れ過ぎている雑煮椀

規雄

(紀)

裸木に二羽の山鳩寄り添ひて

亜也

(紀)

樽酒の振舞ひなくて年初め

全

(紀)

獅子舞をイベントで観る今昔

天牛

(紀)

麻酔さめ抜けし歯ころり五日かな

全

(紀)

棒鱈の佃煮富山の土産かな

全

(紀)

§ § § § § § § § § § §

【句評】

十点句 公魚のひかりとなりて釣られけり 孤舟

健介さん・ひかりは「光」の方が自然では？

恵洲さん・きらりと光りながら釣られた公魚の様を、光となりてと表現されたうまさに痺れま
した。凡手の及ぶところではありません。

千恵さん・晴れた日の寒い湖上で釣り上げた公魚に太陽が当たってキラキラ光る様子が目に見
えるようです、そして釣れた喜びも。

啓子さん・お天気の良い日。「ひかりとなりて」が釣り人の糸の先に跳ねる公魚、同時に足下
の氷も共にきらきらと感じられて、釣った一瞬の切り取りがなんとも美しい景と
なっています。

規雄さん・美しい姿の小魚が春光を浴びてひらひらと釣りあげられて行く様子が目に見えるよう
です。

九点句

艇を塗るペンキの香り春隣

孤舟

堅さん・・・学生時代4年間同じ作業をしました。

恵洲さん・・・春を待ち兼ねて居るヨットマンの心弾む様が見えます

正明さん・・・シーズンを待つヨットの手入れ、良いですね

堂哉さん・・・シーズンを前に仲間と一緒に艇庫でワイワイ、楽しい作業が目に見えます。

テムズ川沿いのヨットクラブで夕方になると仕事帰りの人が三々五々ボートを担ぎ出して、暮れ泥む流れに漕ぎだしていました。

八点句

ふるさとの訛りに和む初電話

昇

孤舟さん・・・石川啄木の心境。

隆さん・・・故郷の友との声の賀詞交換は、帰省の雰囲気になり、正月気分を盛り上げてくれる。

「友だちとふるさと訛り初電話」とぼかしても。

ただしげさん・・・故郷の訛りを聞いて、ほっとする気持ちに共感が持てる。

浩さん・・・年末年始に帰れず久しぶりに故郷と交信をしたらしい様子がほほえましい。

七点句

寒紅をさして舞台の人となる

けい子

紀久男・・・次点です。素晴らしい名句と思います。作者は、一月下旬90歳で亡くなられた

新宿高野の高野英彦さん（フルーツパーラー社長・河東節仲間）と同じく清元の名手です。歌舞伎座や名古屋御園座にも出演しておられます。

孤舟さん・・・舞台人のきりりとした心意気。

恵洲さん・・・楽屋で寒紅をさしただけで、舞台の顔になって、颯爽と舞台に出て行く様

亜也さん・・・ちよつと扱いにくい季語にピッタリな出番を与えた功

六点句

「河東節仲間の なかにし礼 追悼」
地獄を見た詩人を悼む切山椒

紀久男

忠彦さん・・・なかにし礼作詞の「石狩挽歌」が好きで、時々YouTubeで聞いております。

歌詞の「あれから練はどこにいったやら〜」が好きですね。

堂哉さん・・・以前、長崎の史跡料亭花月でしつぽく料理をたべました。それを思い出して、縁のある長崎ぶらぶら節を読んでいます。

けい子さん・・・地獄を見た↓「を」はいらないと思います。

※紀久男・・・上五の字余りは強調の意味です。満州引き揚げの折の悲惨な出来事を詠んだものです。食道癌を最先端手術で二度克服しましたが、残念です。楽屋で一緒に折、奥様の

の姉の いしだあゆみ が来ており華やかな雰囲気でした。

水切りの跳ね春水の点と線

孤舟

恵洲さん・・・水切り石の作る水輪が連なっって行く様を点と線と見たところ面白い

堂哉さん・・・永らく水切りをしています。ワン、ツー、スリーと数えてテン迄続いた時は

無性に嬉しかった。下五が良い

盛雄さん・・・これぞ俳句でしょうか、綺麗な句です。下五の『点と線』がこの句を仕上げました。

川甚の閉店聞く日の寒さかな

恵洲

・・・柴又の川魚料理の江戸時代から続いていた老舗です。

堂哉さん・・・懐かしい店。食後、川堤をのんびりと矢切の渡まで散歩しました

亜也さん・・・洗いもさることながら、鯉こくを思い出しました

十字路を曲がり損ねて寒に入る

正明

五郎太さん・俳諧味があります。私も先日厚着をしていて、つい道を間違えました。

雅夫さん・・・正に寒々しい最近の状況ですね。

現し世のあしたは見えず日脚伸ぶ

びん

孤舟さん・・・コロナ禍の終息は見通せないが、季節は確実に移り変わる。

盛雄さん・・・コロナウイルスに襲われた、国難の日々を詠んだ時事句。下五が良かった。

初御空おもたき潮の満ちてきぬ

びん

啓子さん・・・年が明けた日、海を見ていると夏とは異なる鉛色の重たげなうねりが大きくなりながらゆっくりと潮が満ちてくる。去年今年をじっくり考えるひと刻になりそう。

五点句

疫病と向き合ふ覚悟去年今年

昇

眞希子さん・・・閉塞感を打ち破って「覚悟」という一語で自主性と希望をくれました。

長唄の第一声や春来たり

啓子

・・・歌舞伎座初春公演

千恵さん・・・あの最初の声にはっとして華やいだ雰囲気を感じ、私も「春来たる」と感じました
雅夫さん・・・元気にいこうと初春の温いよい風景を感じます。

正明さん・・・長唄の第一声の高い音、細棹の響き、良い気分ですね

けい子さん・・・コロナの暗い日々、長唄のはなやかな第一声が幸せに感じます。

初夢やウィンファイルから招待状

盛雄

孤舟さん・・・毎年一月一日に行われるニューイヤコンサートに行ってみよう。

隆さん・・・初夢は宝船の絵を枕の下に置くという。あのウィーン楽友協会でのニューイヤールコンサートのチケットかしら。最高の初夢。

四点句

冬晴や門出を祝う米国歌

そらお

隆さん・・・トランプは、世界がまさかという中で米大統領になってしまった。対面よりSNSを駆使して大衆を扇動鼓舞した。国歌斉唱は心機一転、新世界への幕開けとなった。

海老蔵のでっかい見得や疫祓ふ

紀久男

・・・演舞場の歌舞伎十八番「毛抜」

天牛さん・・・「でっかい見得」がいいですね。あまり「でっかい」と云う言葉は使わないのではないですか。之できつと疫は祓える事でしょう。

※紀久男・・・投句してから無季に気づきました。選句して下さった方々に感謝します。歌舞伎座、演舞場、国立劇場で正月歌舞伎です。海老蔵親子人気で演舞場切符は売切れ。客席は物凄い熱気で役者もノリノリ、自信満々、声も仕草も流麗豪快！大向う無しですが、それを忘れさせるほどの大喝采。久し振りにカーテンコールを見ました。海老蔵襲名以来の追っかけ四人娘にも会い、驚き呆れました。

待春のところが溶けるフロマーージュ 五郎太

亜也さん・・・ところがという語感の春を待つ気分との相性が素晴らしい。

浄瑠璃方粋な揃いの黒マスク

千恵

紀久男・・・長唄や浄瑠璃の地方は黒マスクでしたが異様に感じました。マイクを工夫すれば不要と思います。とても「粋」とは思えません。

浩さん・・・劇場の舞台の姿が目に浮かぶ。

ただしげさん・・・舞台に全く違和感がなく、本当に粋な感じがして良い。

雅夫さん・・・正に寒々しい最近の状況ですね。

司馬遼と連れ立つ旅路冬の星

堂哉

「安野光雅逝く」

紀久男・・・天牛さんが同じ歳、同郷で、天牛さんの出版記念会に来ておられました。ご冥福を祈ります。

昇さん・・・私は司馬遼の大ファンで、特に紀行本の「街道をゆく」全43巻には何度読み返しても感動します。取材旅行に同伴していた安野画伯の挿絵も大変印象的でした。今頃は天国で旅の続きを楽しまれていることでしょう。

初御空東に筑波西に富士

堂哉

隆さん・・・シンメトリーは美のひとつ。新年に相応しい。

浩さん・・・冬の晴れた寒空の風景が目には浮かびます

さと風の味わいうれしぶり雑煮　　ゆたか

浩さん・・・「さと風」が何を意味するのか浅学無知の身では分からなかったですが、ぶり雑煮がいかにもたまらんと言う感じが出ていてほほえましい。

亜也さん・・・さと風という措辞に惹かれました。

得意げに母は体操冬ぬくし　　啓子

隆さん・・・人生の先輩はいつも一家言。体操もか。ほのぼのとした。そしてお母様の生きる強さが感じられた。

籠り日の子と酌み交わす四温かな

盛雄

孤舟さん・・・父親は息子が早く成人になり、酌み交わす日を夢見ている。
雅夫さん・・・ほっとします。

三点句

岸壁に脚を垂らして春まぢか

孤舟

浩さん・・・イメージとしては海辺での壁に座って足をぶらぶら。小春日和の穏やかさを想像できて心地よい。

人日の伸びるわが影踏み進む

五郎太

孤舟さん・・・正月を迎え、改めて着実に生きてゆこうと決意。

浩さん・・・季節の移ろいがふと感じられます。

筋斗雲乗り宇宙飛ぶ夢はじめ　　昇

孤舟さん・・・初夢はでっかい方がよい。

充章さん・・・孫悟空になった様な楽しい句。

鳴きかわす鴨寄る枝や春近し

雅夫

・・・番でよく来て鳴いています

紀久男・・・季重なりです。

鯛焼きを買う気まぐれや日脚伸ば

恵洲

啓子さん・・・このところ急に日が伸び、お天気の良い日が多くなりました。散歩にでもでられたのでしょうか、のんびり気分に通ります。のどかな様子が詠われていてほっとします。

盛雄さん・・・小沢昭一さんの「変哲半世紀」を想い出す嬉しい一句。

初夢の脈略なきまま覚めにけり

恵洲

孤舟さん・・・淡く儂い夢ではあった。

最肩力士軒並み負けて寒募る

恵洲

紀久男・・・実感籠っております。下五の措辞がいいですね。

盛雄さん・・・相撲ファンの一人として選句。貴景勝、御嶽海に期待が大きかった。

初詣ひと咫（ひとあた）半の箸求む 啓子

三恵さん・・・深い学識と見事な発想に脱帽です。

紀久男・・・三省堂の古語辞典には載っておらず大体の見当で採りました。

寒月や生業閉づる夜の街 びん

紀久男・・・道頓堀の老舗「河豚のづぼら家」「蟹道楽」などが廃業し、ネオンの灯が寂しくなりました。

再開発の残る一隅石蔭の花 びん

雅夫さん・・・ほっとします。

数の子の薄皮をむく妻無口 天牛

隆さん・・・おせち料理はいつも時間との勝負。手順が頭を廻る。無口に凝縮されている。

孫が継ぐ祝箸の名書く仕事 天牛

恵洲さん・・・祝箸に家族の名前を書く役目を、字を覚えた孫に任せた。孫の得意げな顔が見える読初や「業平」に知るうたごころ 亜也 (紀・五・び)

五郎太さん・伊勢物語がこんなに面白いとは。背景に政争もあり、恋の手ほどきでもあり。

寒鴉心射るよな目の強さ けい子

孤舟さん・・・餌の少ない冬場。餌を見付けた鴉の鋭い眼差し。

髪染めし妻の立ち居や小正月 盛雄

紀久男・・・女正月に美容院へ行って来られた奥様に改めて惚れ直した見事な作品。

堂哉さん・・・奥様への愛情がほのぼのと良いですね！いつまでも身だしなみの粋な奥様の色気が匂っています

二点句 大寒の過ぎて万物目覚めけり 忠彦

孤舟さん・・・すべてが芽吹き咲き活動的となる時がきた。

復路での快挙霧散の三日かな 千恵

健介さん・・・天ですが、これは二日の往路での快挙が三日の復路の土壇場で霧散したことを詠まれたのでしょうか。であれば、失礼ながら、「復路」は「往路」の方が判りやすいのでは、と愚考しますが？

獅子舞や上手に唾ふおひねりを 千恵

紀久男・・・歌舞伎座初日は鳶の者の木遣が玄関ロビーであり、松の内は地下の売店「木挽町広場」で獅子舞が催されます。芝居総見はねて七丁目ライオン新年会でも才藏を先頭に客席を回っていました。この句はその折、啓子さんが祝儀を口に入れた時のものです。

初芝居親子孫三代車引 ただしげ

高麗屋の親子孫三代で松王・梅王・桜丸に

雅夫さん・・・元気にいこうと初春の温いよい風景を感じます。

初芝居若手の熱気歌舞伎座に ただしげ

紀久男・・・浅草公会堂は建物古く換気不良の為「若手歌舞伎」は歌舞伎座の第一部に揃いました。巳之助と隼人の意気の良さが飛びぬけておりました。

線香の封の切り初め初読経 堂哉

盛雄さん・・・弔事の暗さを明るさに変えた秀句。中七が巧みでした。合掌。

巢籠やテレビで寿ぐ初歌舞伎 ゆたか

紀久男・・・季重なりですが外出自粛でテレビ視聴しかない芝居好きのご夫妻のお気持ち伝わる作品です。

孤舟さん・・・海面を茜に染めて水平線をゆつくりと昇る初日の出。

忠彦さん・・・スペクタクルの言葉に壮観さを共感します

空深く煌めくオリオン窓に見る

啓子

龍平さん・・・オリオン座 幼少の頃から憧れていました 今でもこの世が終わればリゲルに

行けるかなと。

久しぶり包丁研ぎや初氷

正明

盛雄さん・・・包丁研ぎの出来る作者に敬意。上五を〃久し振りの〃にされたら如何でしょうか。

股引や穿く穿かざるの見栄残り

亜也

堂哉さん・・・今年の冬は誠に寒く、私はなんと二枚重ねの日が何日もあります。見栄はすっかり捨てました。

梅咲きて四方玲瓏の大阪城

盛雄

紀久男・・・中七の表現がよく効いております。

恵洲さん・・・さすがは豊太閤の城らしい、落ち着いた雰囲気

一点句

リウマチは死語にあらざや初薬師 紀久男

五郎太さん・・・ご本人か、奥様か。私が使っているリウマチ薬(ステロイド)の大量投与が COVID19 に

効くようです。ただ現在でもリウマチの人の3割は効く薬がないとか。

※紀久男・・・一年以上前から右手指こわばりきつく箸が使えませんでした。Eテレの医学番組で手術したら治る可能性があるとのことと整形外科に診て貰いましたら、頸椎骨折の後遺症とリウマチの数値が二倍。リウマチの薬をと服用しましたら一寸掌ひらくようになり経過を見ることに。力入りませんがリハビリ懸命にやっております。亡き母の姉妹四人は重症でした。

初稽古ズームの中の床飾り

五郎太

紀久男・・・茶道でしようか、謡いでしようか？ズームを駆使してお仲間へ話している句とと思います。反応はいかがでしたか？

裸木に二羽の山鳩寄り添ひて

規雄

紀久男・・・愛妻家で知られる作者らしい妻恋の句。我が家のベランダに雉鳩番がよくきてくつろいでおります。

樽酒の振舞ひなくて年初め

亜也

紀久男・・・大阪の独身時代、藤井毛織へ羊毛の下戸の先輩に連れられ代わりに一升榭呑んだことを想い出しました。

麻酔さめ抜けし歯ころり五日かな

天牛

紀久男・・・「五日かな」は正月五日、松の内です。奥様の介護をなさっております。

棒鱧の佃煮富山の土産かな

天牛

紀久男・・・小生の大好物。酒量が増えます。

§ § § § § § § § § §

次回青葉会

・二月二十五日(木) WEBB句会と致します。 3月7日まで緊急事態宣言延長となりました為。

当季雑詠5句 投句お願い致します。(締切2月28日(月) ※月曜日となります。ご注意下さい。

選句表(清記) 配信予定 2月24日(水)と致します。(



一 正月五日(火) 吉例初芝居総見 歌舞伎座第一部 市原夫妻ら15名が参加。皆さま句に詠まれてますが正月の歌舞伎見物の雰囲気は、客席半減、掛声禁止でも辛うじて味わえたようです。

新年会・芝居はねてから七丁目ライオンにて本田(小生の同期入社、かつて句会記録のワープロしてくれたことがあります)ら8名が参加。午後二時頃の銀座通りは人通り少なく、ビアホールも私らが最初の客で、あとも一組だけ。入口に陣取ってゆったり腰かけ、店のサーブスよく、貸し切り気分です。才蔵率いる獅子舞がきたのは初めてです。歌舞伎はねてから玄関で集合写真を恵洲さんが撮り、社友会「田」に寄稿した拙文「大向う」が一月下旬に掲載しております。ご笑覧の上、ご感想、御批判を頂ければ有難く存じます。

二 正月早々、弘子さんが発熱されて、感染原因不明のコロナ陽性で入院され心配しておりましたが、二月始めお手紙にてコロナ罹患はほぼ快癒され、味覚・嗅覚もほとんど回復されたこと、そして、退会のお届けです。俳句は続けられるようですが、万里子先生居られぬ当会とは距離を置きたいこと、また70歳になり老齢を自覚した事がお辞めになる理由のようです。万里子先生の愛弟子で「萬緑」↓「森の座」の幹部になられた弘子さんの努力、精進ぶりには兼がね感服しておりました。小生には青天の霹靂、がっくり来ました。天牛さんに報告し、啓子さんと相談して受理しました。

三 初句会は残念ながらWEB句会になりましたが、21名94句の投句をいただき
ご覧のように、孤舟さん、昇さん、けい子さん、びんさんらが高得点でした。

四 関係者近詠

最寄り駅つひに無人へ海桐の実	眞希子	マスクずらりと踏切を待つ朝	陽充
木の葉髪先に逝きたき夫と妻	全	ひた歩くマスクに吐息籠りけり	全
コロナ二波遠くに聞きて葱刻む	全	手焙りの燠さかんなる巫女溜り	全
ポインセチア献金袋の裏真紅	全	神々に祈る心の寒さかな	全
冬はじめ切りなく喋る大道芸	弘子	身に入むや義太夫三味線客まばら	紀久男
扁額の文字読みやすき冬はじめ	全	山形の秘湯・姥湯温泉	全
灯の海へ脇より潜る酉の市	全	溪紅葉乳白色の露天風呂	全
ロダン	全	口ひんまげ吊るさる鮭の大往生	全
神の旅ひたと閉ぢたる地獄の門	全		

——「森の座」二月号——

蛇笏忌や吾にも消へぬ夢ありし	盛雄	眼裏にふる里の山眠りけり	充章
柿を剥く妻の手ゆらり「ダイヤ婚」	全	水仙や沖に小舟を遊ばせて	全
—— 毎日新聞兵庫文芸12月若森京子選		ゆったりと浸かる昼の湯日脚伸ぶ	全

自分史に空白のあり虚栗 盛雄

—— 毎日新聞兵庫文芸1月 若森京子特選

凡庸に生きて八十路のちゃんちゃんこ 盛雄
時停まりゐて故郷の雑煮椀 全

ウイルスにも己にも克て寒稽古 健介
初夢や大統領に句を教へ 全
初夢やどんじり箱根の山走る 全
初夢や芸妓引きつれ芝居見に 紀久男
初芝居気分乗らない拍手かな 全
——きさらぎ句会 1月

令和三年二月八日

文責 紀久男